2003-4-③

週刊読書人

第2517号　2003年（平成15年）12月19日（金曜日）

100二年の収穫

印象に残った本〈全120冊〉

橋爪　大三郎

上農正剛『たったひとりのクレオール――聴覚障害児教育における言語論と障害認識』（ポット出版）。難聴者の教育に長年たずさわってきた著者が、言語とコミュニケーションの本質にさかのぼって根底から考え抜いた五一二頁の労作。障害を乗り越えていく内発的なエネルギーを「クレオール」と表現したところが素晴らしい。

野崎綾子『正義・家族・法の構造変換――リベラル・フェミニズムの再定位』（勁草書房）。惜しくも昨年亡くなった著者の遺稿。法曹資格をもち、社会学とフェミニズムにも通暁する著者が、どれだけ豊かな視点をわれわれにもたらしてくれるはずだったかと思うと残念でならない。

宮台真司＋神保哲生『アメリカン・ディストピア』（春秋社）。現場のリアルな感覚を大事に、インターネットで発信を続ける両名の「マル激トーク・オン・デマンド」の第二弾だ。アメリカという現代の怪物の秘密に肉薄しようとする意志が快い。（はしづめ・だいさぶろう氏＝東京工業大学教授・社会学専攻）

2003-4-①　『オブラ』第3巻第6号　p148　講談社　2003.6.1発行

オブラの書斎

古典精読

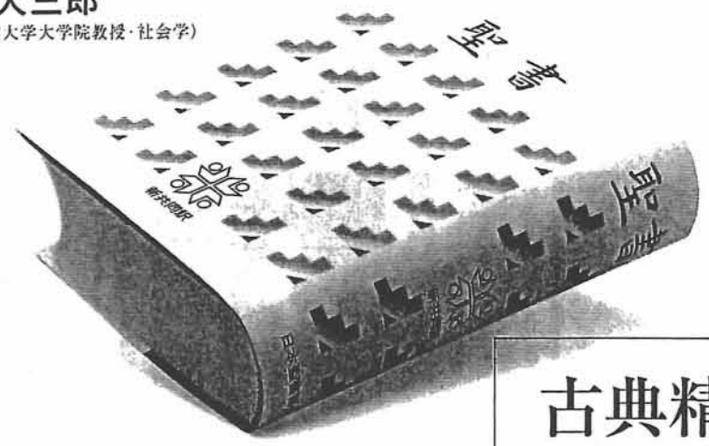
――いまさら読んでなかったなんていえない本

『旧約聖書』

（「聖書（新共同訳）」より）日本聖書協会　2700円

子どもの頃から読んでいると
世界観に影響するのでは？

橋爪大三郎
（東京工業大学大学院教授・社会学）



冒頭の創世記。天地創造に、アダムとイブ、アブラハムの物語だ。そのつぎは出エジプト記。映画『十戒』でおなじみだ。でもその先は、何だっけ？　宗教にうとい日本人の悲しいところである。

『旧約聖書』を開いてみると、以下、レビ記、民数記、申命記と続いている。

ここまでをモーセ五書（トーラー）といい、ユダヤ教の根本聖典である。その後にも、歴史書や預言者たちの書、詩篇などがぎっしり並んでいる。

イスラエルの民を率いたモーセは、約束の地を前にして、生涯を終えた。代わって人びとを率いたのは、ヨシュアである。申命記のつぎに収められている、ヨシュア記を読んでみた。

ヨシュアはまず、エリコの町を偵察させる。町に忍び込んだ斥候は、遊女ラハブの家にかくまわれる。ラハブは一族の命を助けてくれと頼み、斥候は約束して陣営に戻る。いよいよ攻撃。城壁は崩れて、エリコの住民は皆殺しとなり、ラハブの一族だけが助かる。エリコに続き、アイ、エルサレム……と、多くの都市国家が同様の運命をたどっていく。

先住民にしてみれば、ユダヤ人たちは突然やってきたよそ者だ。けれども彼らは、そこが神の与えた約束の土地だという。そこで、王や兵士はもちろん、女や子どもや老人まで皆殺しにしてしまう。

残酷なようだが、古代の都市国家同士の戦争はこうしたものだったらしい。

子どもの頃から『旧約聖書』を、すみずみまで丁寧に読んでいると、やはり世界観に影響するのではないか。

たとえば、ユダヤ人がパレスチナの一帯を手に入れた様子は、入植者たちがアメリカを手に入れた様子と、なんとなく似ている。そして、イスラエルの建国とも似ている。だからアメリカ人は、イスラエルびいきなのだ。

また、情報と内部通報を大事にする。遊女ラハブの一族は、きっとエリコの町で差別され、不満を抱いていたのであろう。そんな人びととの約束も、きちんと守る。約束は神聖なものなのだ。

エリコの近くのギブオンの町は、ヨシュアと平和協定を結ぼうと思った。一計を案じ、まるで遠路はるばるやってきたかのような姿の使節を送ったので、ヨシュアは安全を約束した。あとで攻撃予定の町だったとわかり、イスラエルの人びとは文句を言ったが、ヨシュアはギブオンの人びとを殺すことを許さなかった。不正な協定も守らなければならない。

軍法も厳格である。兵士のアカンは、神の命に背いてエリコの町で、きれいな着物や貴金属をくすねた。ヨシュアはアカンを石打ちの刑（死刑）に処した。

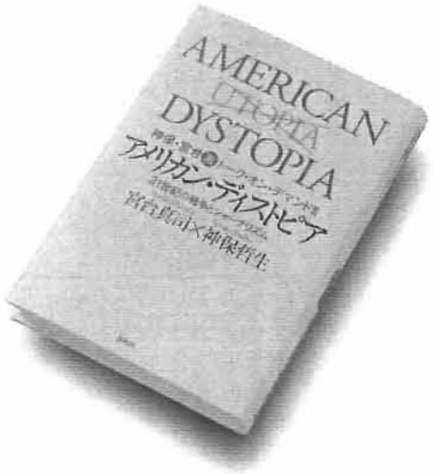
ヨシュア記は、まるでCNNみたいな戦争のパノラマに満ちており、しかも、戦争に関わる正義や決断や戦略・戦術の宝庫なのだ。しかもこれは、小説ではなくて、ノンフィクション。こういうものを読み慣れている人びとは、お人好しになるのは無理というものである。

p14-15 （株）メタローグ 2003.12.1 発行

2003-4-(2)

異質な他者 アメリカ

橋爪大三郎
Hashizume Daisaburo



二一世紀は、どういう世紀なのか。同時多発テロで幕を開け、時代は不透明な未来に向かって進んでいく。

ここでクローズアップされるのが、アメリカだ。無邪気な大衆文化と、傲慢な単独行動主義と。日本人は、異質な他者アメリカの正体を、どこまで理解できているのか。

冷戦は、国際関係を凍結し、日本をアメリカと固く結びつけた。冷戦が終わると氷がとけ出し、イラク、ロシア、北朝鮮、中国……あらゆる国々が自分の位置を手さぐりして動き始める。日本も、アメリカとの関係を再定義しなければならなくなった。

『アメリカン・ディストピア』は、「インターネット配信のニュース解説番組『マル激トーク・オン・デマンド』を、一部抜きだして再編集の上、加筆して活字化したものだ」（まえがき）。冷戦期と同様にアメリカにしがみつく「親米」でも、伏流してきたナショナリズムに居直る「反米」でもない、リアリズムを志向する両者のスタンスに共感する。

『キャッチャー・イン・ザ・ライ』は、村上春樹氏による『ライ麦畑でつかまえて』の新訳。経済成長神話が崩壊した九〇年代以降の日本の閉塞感と、豊かさのなかでのやり場のない鬱屈が、サリンジャーの感性に近づいた。アメリカを内在的に追体験する試みとして評価したい。

『正義・家族・法の構造変換』は、野崎綾子氏の遺著。野崎氏は、弁護士で、私を指導教官に、東工大の博士課程に一時在籍したあと、東大大学院の井上達夫教授（法哲学）のもとに移り、助手の職にあったが、惜しくも昨年他界した。本書は、リベラリズムとフェミニズムを法学の領域で融合的に再構築しようとする意欲の結実である。アカデミズム新世代のリーダーとして期待していただけに、残念である。

（社会学）

単行本ベスト3

『アメリカン・ディストピア
——21世紀の戦争とジャーナリズム』
宮台真司＋神保哲生／春秋社

『キャッチャー・イン・ザ・ライ』
J・D・サリンジャー／村上春樹訳／白水社

『正義・家族・法の構造変換
——リベラル・フェミニズムの再定位』
野崎綾子／勁草書房

文庫本・新書ベスト3

『論理哲学論考』
ウィトゲンシュタイン／野矢茂樹訳
岩波文庫

『ユリシーズ全4巻』
ジェイムズ・ジョイス
丸谷才一＋永川玲二＋高松雄一訳
集英社文庫（刊行中）

『漢字の世界
——中国文化の原点1・2』
白川静／平凡社ライブラリー

2003年・なんでだろ〜 自分の財布を誰に預ける

日本人の預貯金の合計は一四〇〇兆円（国民一人当たり一〇〇〇万円）余りというが、その半分ぐらいは、国や自治体の財政赤字で喰い潰されている。仮に国民から税金を集めて累積債務をいますぐ穴埋めしたとすると、預貯金の半分が消えてしまう計算になる。

この期に及んで、まだ高速道路をつくろうと言っている人びとがいる。正気の沙汰とは思えない。一部の業界や地域のほんのひと握りの人びとの利益のために、いらないコンクリの塊ができるかわりに、貴重な国民の財源や年金資産が消えてしまうのだ。

アメリカで車に乗ると、生活道路はボロボロだ。ああ、民主主義だなあ、と思う。地方議会に土建屋はいない。町で集めた税金をどう使おうかと考えたら、道路の優先順位は低かった。通ればいいという考えなのだ。

地方交付税などという「棚からぼたもち」制度のおかげで、日本中がたかりの構造になった。貯金をはたき借金を重ねてまで、自宅の改築ばかりを続ける愚か者はいない。自腹で費用を負担するとき、誰もが賢い。そういう馬鹿をするのは、親がかりのどら息子か予算目当ての省庁に決まっている。

政策と財源と日程表を明示したマニフェスト（政権公約）が、はじめて総選挙の焦点になった。遅すぎたが、よいことだ。国家財政を自分の財布と考えよう。そうすれば、自分たちの代理人＝政府に何をやらせたいのか、はっきり意志表示することが大切だとわかるだろう。